



鳥取市教育センターだより

第4号 令和元年12月19日発行

〒680-0053
鳥取市寺町150番地
TEL 0857-36-6060
FAX 0857-26-3878
E-mail
kyo-center@city.tottori.lg.jp

思いを届ける「言葉」で信頼関係を！

所長 東田 重高

令和元年も残りわずかとなりました。教育センターでは、皆様に支えていただきながら教職員研修、きなんせ！English World キャラバン、適応指導教室「すなはま」の運営等に取り組んできました。子どもたちの夢や希望の実現に向けて教育活動にご尽力いただいた皆様に、職員一同、心より感謝申し上げます。

この秋、日本で開催された「ラグビーワールドカップ2019」は、多くの感動を与えてくれました。特に、ラグビー日本代表スローガン「ONE TEAM (ワンチーム)」が強く印象に残っています。「全員同じ目標に向かって一つになろう」という意味が込められており、私も含め仲間（同僚）や子どもたちに話をされた方が多かったのではないのでしょうか。

また、臨機応変に対応しながら仲間を信じて走り、パスがつながりトライを決める場面が今でも目に浮かびます。チーム内で互いに本音を出し合い受け止めた「言葉」、コミュニケーションの高まりがチーム（組織）としての強い絆・信頼関係の構築につながったと伺いました。人はその「言葉」に心を感じ、気持ちを込めて伝えていきます。相手の心に響く「言葉」のパスが届けば、相手も送り手の心や思いを感じてパスを返してくれるはずです。

さて、年の暮れになると右の「一秒の言葉」という詩を思い出すことがあります。皆さんなら「 」にどんな言葉や思いを込めたいですか。この一年、このような「言葉」をだれにどのくらい伝え、周りの人とつながることができたでしょうか。自分自身や子どもたちが成長している姿を思い浮かべながら一年を振り返り、笑顔で新年を迎えたいものです。

来年も引き続き、ご支援・ご協力を賜りますよう、どうぞよろしく申し上げます。

『一秒の言葉』 小泉 吉宏

「はじめまして」

この一秒ほどの短い言葉に、
一生のときめきを感じることもある。

「ありがとう」

この一秒ほどの言葉に、
人のやさしさを知ることがある。

「がんばって」

この一秒ほどの言葉で、
勇気がよみがえってくることもある。

「おめでとう」

この一秒ほどの言葉で、
幸せにあふれることもある。

「ごめんなさい」

この一秒ほどの言葉に、
人の弱さを見ることもある。

「さようなら」

この一秒ほどの言葉が、
一生の別れになるときがある。
一秒に喜び、一秒に泣く。
一生懸命 一秒。



鳥取市教職員研修では、受講者が研修で学んだことを自分自身の実践や校内の取組に活かすとともに、校内OJTを推進し、学校の組織力を向上させることを期待しています。

中堅教諭が集合研修や企画選択研修の学びを情報発信し、校内OJTにつなげている取組を紹介します。



(湖山西小学校)

【取組例1】職員研修での情報発信

＜中堅教諭の声＞

保育体験で学んだ保育の目指す学びや幼児教育の目指す幼児の姿、保小連携の視点等を中堅教諭が職員研修で講義して情報発信した。園長先生や保育士さんとの協議を通して、「幼児期の終わりまでに育てほしい10の姿」を踏まえ、小学校での学びにつなげていくことの大切さを再認識した。学校では、1年生だけでなく、他の学年と保育園との交流計画も内容等を見直して提案した。

【取組例2】研究だよりでの情報発信

＜中堅教諭の声＞

職員会や職員研修の中で研修報告の時間を確保することが難しかったので、研究主任と相談し、集合研修の内容を研究だより(夏休み特別号)にまとめ、全校職員に配付した。

子どもの気持ちを聞き出す聞き方や、発達の気になる子どもが示すサイン等への気づきを大切にする、教育のユニバーサルデザインについて教職員に具体的に伝え、日常の指導に活かした。

【取組例3】若手教員への往復型の校内研修

＜中堅教諭の声＞

夏季休業中に、研修内容を1枚の資料にまとめ、それを自分の言葉で講師、初任者に伝えたことで、自分自身も研修内容の理解を深めることができた。講義を受けた講師、初任者はレポートを中堅教諭に返し、往復型の校内研修を行った。

また、日常の授業を公開し、いつでも講師や初任者の先生が授業参観できるようにしている。講師や初任者の授業づくりの参考になるように指導案も公開して、一緒に授業づくりを行った。職員室での何気ない普段の会話も大事にしていきたい。

「幼保小中連携研修」を行いました！

鳥取市教職員研修2年目の本年度は、こども家庭課と連携を図り、幼保小中連携研修を新設し、特別支援教育ワークショップとのコラボ研修として実施しました。本研修は、各園の副園長先生を対象とした研修ですが、各園からたくさん希望参加があり、受講者の高い意欲がうかがえました。

研修講師として広島大学大学院教授七木田敦先生を招聘し、「子どもの育ちを支える身体づくり」と題して講義していただきました。褒めることの大切さや視覚的刺激を軽減することが子どもたちの集中力を高めること、不器用な子どもへの支援として楽しく身体を動かす運動が有効であること等、すぐに実践に活かせることを学ぶことができました。

本研修の学びを、目の前の子どもの育ちと学びのために実践につなげてくださることを期待しています。



＜参加者の声＞

(研修会の様子)

- 子どもの立場に立って褒める、認めることを大切にして自己肯定感を高めていきたい。
- 身に付けておきたい36の動きを意識して遊びに取り入れていきたい。子どもが主体的に楽しめる運動遊びを工夫し行っていきたい。
- 子どもたちのやる気を引き出し、モチベーションを上げることで子どもの能力も引き出せるとわかりました。

不登校や行き渋りは、特定の子どもに起こることではなく、どの子にも起こりうることです。学校と保護者が共通理解を図り、改善に向かっている事例を紹介します。

(実態)

小6男児。小5の冬休み明けから登校できておらず、ずっと家にいる。表情も暗くなっている。
小6の4月、SCの紹介で鳥取市教育センター適応指導教室を3日間体験した。



| 月 | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 |
|------|-----|-----|----|----|----|----|
| 欠席日数 | 12日 | 19日 | 8日 | 2日 | 3日 | 5日 |

※年度当初には、前年度の担任、SC、市教育センターとの丁寧な引継ぎを行い、本人の実態把握に努める。

| | 本人の状況 | 本人に対する支援 | 保護者に対する支援 |
|----|---------------------------|--|--|
| 4月 | 適応指導教室に3日通うが、その後は自宅で過ごす。 | 担任が定期的に家庭訪問。 放課後を利用した担任との交流をスタート。 | 定期的に家庭訪問し、悩みに寄り添いながら、母との信頼関係の構築を図る。 |
| 5月 | 週1回の放課後を利用した担任との交流が徐々に定着。 | 本人の意思で登校日・活動内容を決め、相談室で過ごすことをスタート。(必ず担任との時間を確保。) | 学校・保護者ともに本人に対して「ほめる」「認める」の関わりを行っていくことを共通理解。 |
| 6月 | お弁当を持参しての相談室登校が徐々に定着。 | 在籍学級の生活の流れに合わせた1日の予定表(本人の意思を尊重した予定)作成がスタート。 | 本人の学校での様子、特に頑張っている所を中心に伝える。その日のうちに報告することを心がける。 |
| 7月 | 1日の予定表に添った生活が徐々に定着。 | 1日2時間の級外の教員による学習支援をスタート。 | 宿題の量等、些細なことでも保護者が相談しやすいように顔を合わせて情報共有を行う。 |
| 8月 | 夏休みに入り、自宅で安定した生活を送る。 | 担任が定期的に家庭訪問。 9月実施予定の修学旅行の日程等の文書を事前に渡し、今後の見通しが持てるよう様々な情報を提供。 | 修学旅行についての不安や不明な点を保護者から丁寧に聞き取り、そのことについて、一緒に考える。 |
| 9月 | 徐々に相談室登校のリズムを取り戻す。 | 行事に向けて、丁寧に思いを聞き取る。事前学習の予定を伝え、学級と本人とのつながりを少しずつ作る。 | こまめに情報交換し、保護者の心理的側面を支え、積極的に応援する関わりをもつ。 |

(現在の状況)

修学旅行に参加したことをきっかけに、教室で過ごすようになる。現在は週1～2日程度の欠席は見られるが、学級で元気に過ごしている。

(効果があった要因)

- ① 関係者とともに本人・保護者の意向を丁寧に確認すること。
- ② その思いをもとに具体的な選択肢を考え、具体的に示す。
- ③ 必要な情報は、本人の安心につながるよう家庭訪問をして、直接顔を見て、提供する。